

シャンティ国際ボランティア会のレシピ： タイ王国・メーソット、 ミャンマー難民キャンプ での図書館事業

ミャンマーにおける活動背景

1984年以降、ミャンマー（ビルマ）の軍事政権と少数民族の反政府勢力との紛争や人権弾圧、また強制労働や強制移住などの問題からタイへ逃れてきた難民は現在、約15万人に及ぶ。9ヶ所の難民キャンプが2千キロに及ぶタイ国境に点在する。ミャンマー国内の民主化が進まない中、帰還の目処は今なお立っておらず、一方で新たな難民の流入も続いている。

シャンティ国際ボランティア会（SVA）は2000年9月よりタイ、ミャンマー国境にある難民キャンプにて図書館事業を実施している。難民に対する支援は、1997年から幼児・初等教育分野に限って認められるようになったが、活動を支援するNGOはなかった。そんな中でSVAは、カオイダン難民キャンプでの図書館活動の経験を生かして、図書館活動を中心とした人道支援事業を開始した。

SVAの図書館活動

図書館事業では難民の母語であるカレン語、公用語であるミャンマー語に翻訳した絵本、大人向けのミャンマー語の図書を配布し、絵画、工作、ゲームなどの文化活動、伝統舞踊・楽器教室、高齢者のための活動などを行い、

図書館にとって欠くことの出来ない図書館員を養成している。図書館は静かに本を読む場所だと理解していた難民にとって、子どもたちが走り回り大笑いしている図書館は理解しがたかったようだ。

SVAが図書館事業を展開するにあたり、図書館委員会を設置し、難民による図書館運営への参加を高めていきたいとの思いがあった。しかしこの図書館委員会の構成メンバーを見ると、キャンプ委員会、教育委員会またCBO（Community Based Organization）など、すでに他の委員会のメンバーである人たちがほとんどであった。図書館活動の必要性を認めてはくれているものの、同じ人が二役も三役も担っている状況から図書館活動に割ける時間がほとんどない。その背景には図書館委員会の主な仕事は建物の管理であり、活動の実施担当はSVAであり、自分たちは単なるお手伝いにすぎない、といった理解があったからだと言える。20年以上に渡り外部からの「援助」に依存することでしか生きていけなかった彼らにとっては、当たり前の認識かもしれない。

しかし難民キャンプだろうが、どこだろうが人材を作り上げていくことの重要性は変わりはない。だから難民キャンプが例え一時的な避難場所であ

っても、そこにあるコミュニティー（共同体）を発展させることが人づくりにつながるのだと感じた。何故もっと多くの人材を巻き込み育成していけないのだろうか、その理由を図書館委員会に尋ねてみた。「言っていることは理解できるが、現実として知識や経験の



社団法人
シャンティ国際ボランティア会
ミャンマー難民事業事務所
所長

中原亜紀

ない難民が責任ある仕事に関わるというのは難しいことだ」という回答が返ってきた。

そのような考え方が主流を占める中で、図書館委員会を中心とした難民による図書館運営への参加を可能な限り高めることに力を注いでいる。特に図書館委員会に対しては単に建物を管理することだけではなく、SVAとの協力的体制で難民という人間の質をどう高めていくか、そのための活動をどう展開していくか、ということを考え実践してほしいことをずっと伝えてきている。

人材育成を目指して

ミャンマー難民キャンプにて支援活動を実施しているNGOの9割以上が欧米の団体であり、欧米的な考えや手法がキャンプ内では中心になっている。日本のNGOとはこれらの点で異なることが多い。彼らの考えの中心は事業をいかに展開していくかであり、難民という人を育成することにはあまり重きを置いていないように感じる人が多い。日本のNGOとして、また人づくりに重きを置くSVAの図書館事業はミャンマー難民キャンプでは必要不可欠な事業であると強く感じている。

SVA

1980年、タイのカンボジア難民キャンプで図書館活動を開始。現在、タイ、カンボジア、ラオス、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ、アフガニスタンに事務所を置き、図書館活動を中心に子どもの教育や文化の支援活動に取り組んでいる。また国内外の災害支援地への緊急救援、復興支援なども行い、世界の人々が「共に生き、共に学ぶ」心の平安に根ざした平和な社会づくりを目指している。



メラウキャンプ：歌の時間図書館員と一緒にリズムをとって歌う子供たち
撮影：瀬戸正夫 写真提供：SVA